

「西アフリカ・ギニア湾沿岸地方の伝統工芸の研究」

研究年度・期間：平成5年度～平成7年度

平成5年度

研究代表者：森 淳
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 助教授)

共同研究者：桜井 忠彦
(工芸学科 助教授)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
高畠 克己
(大学院 助手)

研究補助者：宮脇 篤志
(大学院 副手)

平成6年度

研究代表者：森 淳
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 助教授)

共同研究者：桜井 忠彦
(工芸学科 助教授)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
高畠 克己
(大学院 助手)

平成7年度

研究代表者：森 淳
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 助教授)

共同研究者：桜井 忠彦
(工芸学科 助教授)
下休場千秋
(環境計画学科 講師)
高畠 克己
(大学院 助手)

研究経過の概要

この年度をもって3年の共同研究を終えることになるので、各自の研究についてはそれぞれが以下のような研究を行った。特に研究のまとめのようなことにして、それぞれが文献資料の整理、論文にまとめて発表した者もあり、また論文にする目的で研究の整理をした者もあった。研究代表者森淳は、定年を迎える最後の年なのでアフリカ研究室に残して行く文献資料の整理を行い、特に写真等を台紙に貼り、西アフリカの調査地に分類し後任の研究者が使いやすいように整理を行った。また研究ディレクターである井関和代は、この期間に文部省の科学研究費補助を受けて、カメルーンを調査する機会もあり、これまで収集して来た資料と併せて成果を上げることができた。共同研究者の下休場千秋は学会等で研究発表を行い、成果を上げ大阪芸術大学におけるアフリカ研究を知らしめる結果となった。共同研究者の桜井忠彦は、森淳がガーナの調査時に撮影して来たアシャンテ族の鑄造に関する記録を元にして、研究を行い金属博物館での指導をえてアフリカの鑄造技術の解明を行うことができた。また高畠克己は森淳が西アフリカの調査時に採録してきた子供の歌や、音楽等の録音テープの整理をおこなった。子供の歌については森淳がビクターから依頼を受け、「小学生の音楽鑑賞」3年生と6年生の2枚のCDの一部に採用され、解説と歌の翻訳とを執筆した。

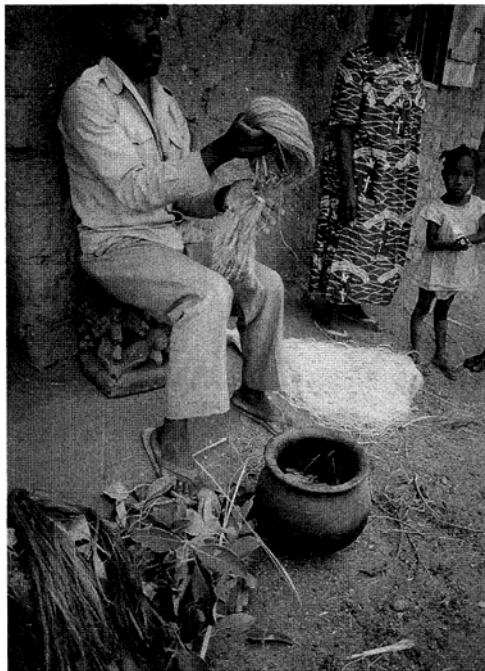
研究成果について

西アフリカ・ギニア湾沿岸地方には多くの国があり、それぞれの地方によって伝統工芸の継承の形態に違いが認められるが、この研究班としては主としてカメルーン、トーゴ、また沿岸地方とはいえないがサヘル地帯の伝統工芸の調査を行ったマリなどの諸国に目標をおき、3年の継続研究を行うことにした。この研究を通じて各自が多くの成果を見ることができた。研究代表者の森淳は、この間にアイオワ大学で行われた Clay and Fire - African Pottery in Social and Historical Context - 学会に招聘され発表を行った。また中国の景德鎮で行われた 95 Jingdezhen Kaolin International Ceramic Art Conference に招聘され講演を行った。そのほかオーストラリアで発行されている Ceramics TECHNICAL 誌に “Pottery Forming Techniques in West Africa” を寄稿した。共同研究者井関和代はこれまでに収集している資料の整理をするとともに、今回は特に首長の伝統衣装の研究に主力を置き、文部省科学研究費補助を受けてカメルーンのパツツ王国の首長の衣装について研究を行い、学会で発表を行った。下休場千秋は整理した資料を元に、塚本学院海外研修制度を授与され、カメルーンの伝統的な民族芸術が近代的な物質文化の中でどのような対応に迫られているかを、環境計画の視点から研究を行いそれぞれの学会で発表を行った。桜井忠彦はガーナのアシャンテ族の金属鑄造技術について研究を行い、日本金属学会付属、金属博物館の学芸員と資料の交換を行うことが出来た。高畠克巳は森淳が長年にわたって収録してきたアフリカの子供の歌、その他アフリカの音楽等の録音テープの整理を行い、地方別の分析を行った。

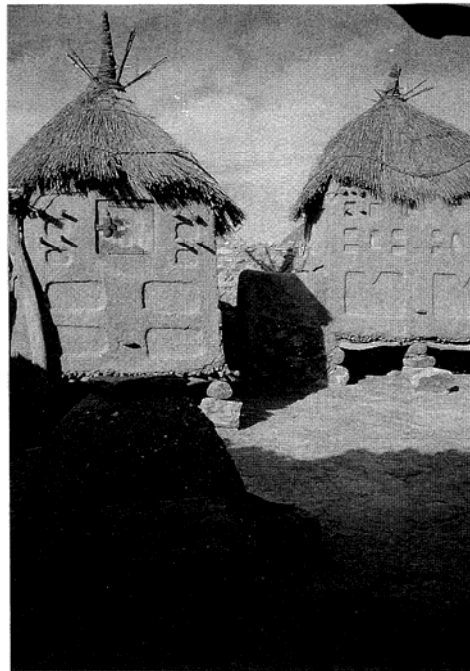
研究の反省

研究は順調に進行して来た感があるが、それぞれの研究には差異があるためチームワークがなかなか取れないきらいがあったが、結果としては研究成果の欄に述べたようにそれぞれ高い成果をあげることができた。しかし資料の保管場所に制限があり、希望としては資料を展示する場所があることが望ましいということである。今後このような共同研究を行う場合は、お互いの研究の経過を認識する必要があるのではないかと思う。また現地をまだ知らない研究者にとっては文献のみの研究にならざるを得ず、かなり苦痛を強いたきらいがあったように思われた。出来得れば共同研究者全員で現地調査が出来ることがあれば、共同研究はさらに進捗し、満足出来る結果を迎える事であろう。といっても今回の研究は研究成果についての欄に述べてあるように、高い成果を上げることが出来たことを報告したい。

(森 淳 記)



(写真1)



(写真2)

カード化を行なった資料の一部

(写真1) 井関和代撮映、「カメルーン、ティカール族のラフィア染色・黒染」

(写真2) 下休場千秋撮映、「マリ・ドゴン族の住居」